「記憶の珍味 諏訪綾子展」関連企画

諏訪綾子×中野信子(脳科学者)対談

日時:2020年1月23日(木)

場所:WORDホール

司会 本日のトークでは、お二人には展覧会のテーマ「記憶の珍味」にちなんで、記憶についてお話をしていただきます。実は、お二人は非常に仲の良い間柄ということで、本日はふだんのようなカジュアルな形でお話をしていただければと思っております。

○諏訪 中野さんとはお友達になってから 1 年ぐらいなんですけれども、去年の 2 月ぐら いに私が「Journey on the Tongue」(舌の上 で旅をする)という作品を発表したときに中 野さんが来てくださったんです。

○中野 レクサスの展示スペースがあって、 そこで発表されていました。「Journey on the Tongue」は、食べることができるアートなんですが、すごく不思議な体験でした。 口の中がこんなに豊かなものなのかということを改めて知る体験でもあり、すごく楽しく て新鮮で、3時間ぐらいその場にいました。

○諏訪 この写真がその作品です。ちょうど 会場にいたら、テレビで拝見していた中野さんがいらっしゃったのでお声がけしました。 そうしたら体験してくださっていて。



「Journy on the Tongue」2019 Photo: INTERSECT BY LEXUS



○中野 本当に楽しい旅なんです。ご覧のように座ってキャンディーのような作品を口に入れるとすごく豊かな体験ができるんです。 そのときに私が、口の中っていうのは実はとても敏感で、脳の表面にあるホムンクルスという人間の体に対応した形で体を描いていくと、唇がものすごく分厚くなり、いびつな形の人間のようなものが脳表に描けるという話をしたと思います。

○諏訪 そうですね。初めてお会いしたときに、ホムンクルスの話を熱く語り合いました。ぜひ皆さん、後で「ペンフィールドのホムンクルス」って検索してみてください。ちょっと不気味な画像が表示されると思いますが、それが「脳の中のこびと」といわれるホムンクルスなんですね。

今、中野さんが説明してくださったように、 触感とか視覚とか舌とか、いろいろな感覚を 脳の表皮の比率で当てはめると均一ではなく、 やはり手のひらとか唇とか、そういう部分は すごく大きな比率を占めていて、その比率で 地図を描いたらこうなるというのがホムンク ルスと言われていています。

〇中野 この展示を体験して、諏訪さんは、ただ食べ物をアートにするのではなく、食べ物を通じて人間の中に分け入ることを試みている人だと思いました。その後いろいろお話ししていくうちに、子供のころから食べ物をつくって人に新鮮な驚きを与えるのが好きだったとか、海岸で見た不思議なものを食べ物にしてみたというようなお話をしてくれましたね。

○諏訪 私は能登半島で生まれ育ち、半島な ので海も山もすごく近く、そういうところで 遊んでいると、海には得体の知れない、子供 からしたら宇宙人にしか見えない奇妙ないき ものが流れ着いて無数に浜辺に打ち上がって いたり、山に行けば見たことのない奇妙な花 や実や菌、それからなにかの死骸のようなも のとか。でも教えてくれる人がいないと結局 正解がわからないまま奇妙なものとしてそれ と向き合うことになるんです。ちょっとグロ テスクだしヌメヌメして光っていたりするも のを、つついたり、匂いを嗅いだりしてずっ と観察しているうちに、ああ、これを誰かに 食べさせたいなという気持ちがむくむくと湧 いてくるんですね。それでそれを友達に食べ させようとするんですが、なかなか食べてく れない、そこでちょっと手を加えてすてきな お料理かのようにして出すと、食べてくれる 子もいたのです。そういう遊びをして育ちま した。

〇中野 食べるという行為は、私たちは何気なくしていますが、実は進化的に吸収しているというなにかものを吸収しているないです。外界からなにし、要らないものとないう行為は、生命を維持するという行為は、生命を維持するというで、生命を担けであるというではないで、で、で、これを思い出させるというか、まなの一番緒元のないます。とのそれを思い出させるというかますというで、それを思い出させるというかますというがよったでもの何十億年前に一番初めにがしておもしるかったです。

「Journey on the Tongue」は空間の旅のようですが、私にとっては時間の旅のようにも感じられて、その体験を味わいたくて何時間も滞在してしまったんです。

○諏訪 中野さんはこのとき 3 時間くらいかけて全種類を体験してくださって、目の前のカフェで一緒にいらした方とずっとお話しをされていましたね。

○中野 そうでした。こういうことをやる人が日本にいたのかと思って、ちょっと感動したんです。大げさかな。

○諏訪 ありがとうございます。すごくうれ しかったです。この作品はあじわうことの可 能性をどこまで追求できるかという挑戦でも あって。ふだん私たちは毎日何かを食べてい ますが、ほとんどの人が、おいしい、ますが、ほとんどの人が、おいしい、まず、 好き、嫌い、美容にいいとか、健康にしいい、 好養源、エネルギー源というふうにあじわっ ていると思うんです。でもそれだけに収まり きれない可能性が食にはあると思うんです。 「Journey on the Tongue」というタイトルの とおり、食べることで口の中で時間が伸び縮 みしたり空間移動するような旅をするぐらい のことはできると思うんですよね。

○中野 こういう表現がいいのかわからないですが、口の中で味わうというのは、ちょっとエロティックな感じがしておもしろかったんです。余り口って意識しなのですが、こんな感覚もあるというのを初めて知った、というところがありました。口の中は無防備じゃないですか、粘膜なので傷つきやすいし。そこから何か違う感覚が入ってくるというのが、すごく新鮮だと感じたのです。

資生堂ギャラリーの展示では、複数の香りか ら1つを選んで味わうという体験ができ、あ とリチュアルもあるんですよね。これも記憶 を共有するという試みなんですよ。諏訪さん の記憶の中にあるなにかを諏訪さん自身が形 にするんですね、食べられる形に。それをゲ ストがあじわうという儀式なのです。この、 記憶を共有するというのがこう……エロティ ックと表現していいかどうかわかりませんが。 そもそも生物の情報交換というのは、我々は 言語で行うのが普通だと思っていますが、人 間以外の生物は言語を持ちません。哺乳類は 割と音声を使ってコミュニケーションするん ですが、ほかの動物はどうしているかという と、DNAの交換でしか次世代に残る情報が 交換できないんです。有性生殖する種は特に DNA を交換する以外の次世代に残る情報の 残し方というのがないので、こうやって記憶 を交換するというのは生殖に似ていると思っ たんです。食べるのですが、もっと人格的な 融合に似ていて、すごくおもしろいと思いま す。きれいな形なのですが、これは性行為に

似ているとちょっと思いました。(笑)



「記憶の珍味」会場風景 2020 Jan.

○諏訪 なるほど、面白いですね。 今回発表した「記憶の珍味」は体験型の作品で、2種類あります。ひとつは、今、ないおった、ある意味儀式的アルウンでがいますがですがですがです。ものないですが、週に1回これがある場所で、私が週に1回これがある場所で、私が週にもあじれる方と一緒に記憶の珍味を執がすいるですがやってもの珍味を味わってもらっという体験です。



「記憶の珍味」リチュアル 2020 Jan.

○中野 「珍味」というワーディングも新しいですよね。余りアートの展覧会で使う単語ではないと思うんですけど……。これにもこだわりがあるんですよね?

○諏訪 そうですね。まず資生堂ギャラリー

で新作を発表するにあたって、圧倒的に美し い、資生堂のイメージで強い美しさを提示し たいと思いました。その中でも「珍味」は美 しいって私は思ったんです。いわゆるお酒の おつまみでも食べるようなあの珍味なのです が、希少性がありなかなか手に入らないとか、 ちょっと癖があって人によっては好き嫌いも ある、でも1回はまると止まらなくなってや みつきになるというのが珍味的なあじわいだ と思うのです。そういう意味では記憶にも珍 味的な記憶というのがあるんじゃないかと思 うんです。私たちは、昔の記憶もあれば昨日 の記憶も、時々思い返すという体験を日々繰 り返しています。そうやって繰り返していく うちに、新たなあじわいが生まれてくるとい うか、噛みしめることでうま味がどんどん出 てきてだんだんあじわい深くなってきて、記 憶の最初の体験から少し感化していくという か、変容していくみたいなことがあるんじゃ ないかと思うんです。そういうものを私は 「記憶の珍味」と呼んでいます。

○中野 なるほど。では、そもそも私たちが何のために記憶を持っているのかというところから考えてみたいと思います。「どうしたら記憶力がよくなりますか」というようなご質問を私はよく受けます。

が、記憶力をよくする方法はライフハックのようなものとしてはなくはないのですが、本当に大事なことは、私たちが都合のいいことだけ忘れるようにできているということのほうです。都合のいいことだけ覚えていると言ったほうがいいかな。嫌な記憶を忘れるように私たちはできていて、でも嫌な記憶というのは、私たちの意識が嫌だと思っているのではなくて、生存に必要な情報は覚えていて、要らない情報は忘れていくようにできているんです。

みなさん、実はよくよく考えてみると、嫌なことばかりよく覚えていたりしませんか。もっと言うと、雨女・晴れ女、雨男・晴れ男という、「私がどこそこに行ったときは雨が降るのよね」という言い方がありますね。あれは、なにかイベントのときに、いやなことがあった――雨が降ったという記憶のほうが強く残るからなのです。長いスパンでみたら

必ず平均化されて、いや、そうでもないよということになるはずなんですが、「雨女です」という人は、イベントの日に雨が降ったということをよく覚えていやすいタイプ、要するに危機回避能力が高い、もっとざっくり言うと、非常に悲観的な人ということになります。

○諏訪 晴れ女はどうなんですか。

○中野 晴れ女の人は楽観的な人ですよね。 晴れていたときのことしか覚えていないって いう。

○諏訪 私、晴れ女ですよ。(笑)



〇中野 諏訪さんはそっちだと思う。本当にそう思う。すごい冒険者の精神がある人で、ネガティブなことよりも、これから先にある新しいことが好きな人なんだと思います。モデレートな安定した幸せよりも、もっとエクストリームな体験が好きで、新しい体験を常に追求していきたいタイプのパーソナリティなんだなと思うのですが(笑)、多分そうだと思う。

○諏訪 中野さんはどちらなんですか。

○中野 私は、どっちでもないかなあ。でも 新しいことはやっぱり好きです。自分が今ま で会ったことのない人に会いたいという気持 ちはすごく強いです。

記憶ってそういう、嫌なことばかり覚えているということはよくあることで、もっと幸せな記憶だけたくさん蓄えておきたいけど、そうもいかない。それは幸せな記憶だけ持っ

ているということが、実はこの先生きていく ことに余り役に立たないということでもある のです。私たちの脳は、ここに行ったら嫌な 目に遭った、この人に会ったら嫌な目に遭っ たということを覚えておけば、次にその場所 に行くときに何か準備ができるかもしれない、 次にその人に会うときに対処ができるかもし れないと、嫌な記憶のほうを強く覚えておく ようにできているんです。

珍味的な要素というのをなるほどと思ったのは、私たちはいい気持ちになった記憶を思い出すよりも、何か傷をえぐるような記憶を反芻したりしませんか?嫌なんだけど、思い出しているうちにそれが癖になる快感というのがあって(笑)、嫌な記憶なんだけれども、これを手放すのは惜しいなという気持ちになったり、思い出しているうちに、ああ、前ちにとってこの出来事でしていったりということをですね。そのプロセスのことを思いましたがいかがですか。

○諏訪 確かにそうですね。今回の展覧会では、何種類かの記憶の珍味を体験していただくのですが、大雑把に説明すると、私の脳の中に皆さんに入っていただくような感覚です。まずは、私の個人的な記憶の珍味をちらっとお見せするので、それを横目で見ながら自分自身の脳内というか体内の奥深くに入ってあらりかな記憶を奥から掴み取って、自分自身の珍味的な記憶を奥から掴み取ってあじわうという体験です。作品のなかではちょっと赤裸々に私自身の記憶の珍味を皆さまにお見せしているところがあります。

○中野 自己開示と呼ばれるものですね。心理学の用語なんですけれども、これは信頼している相手にしかしないことなので、諏訪さんは展示会場に来てくれた人に自分から自己開示することによって、来てくださった皆さんの自己開示を促すということを試みているのですね。

○諏訪 そうかもしれません。

○中野 それは言語的に誰かに対して自己開

示するということではなく、諏訪さんに対してでもなく、自分に対して自己開示するということですね。例えば自分が今まで見ないようにしてきた記憶や忘れてしまった記憶、そういうものを少しずつ記憶の海の中からサルベージしていくという、そのトリガーとして8つの香りがあるというしつらえになっているんですよね。



「記憶の珍味」会場風景 2020 Jan.

○諏訪 たぶん、そのようなことだと思いってとだと思いってとだと自身の珍味と向きさんが出まっているというです。そうするとではないにないないです。そうするといるです。そうするといるでは、ないの本当にないないではないではないではないです。というではないです。そうするという気持ちになったがです。そうすると、というないです。そうすると、というないです。そうすると、というないです。そうないではないではないです。そうないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないがないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないです。そのようないからないです。そのようないからないです。そのようないからないです。そのようないでは、そのようないです。そのようないでは、そのようないかにないです。そのようないかにないです。そのようないかにないます。

珍味がどんどん溜まっていくのも悪くないな と思って……。

○中野 ああ、おもしろいですね。

○諏訪 何か旨味が出てくるというか、自分の中に溜まった珍味が、ある意味発酵したり、熟成して、それが溜まっていったときに、だんだん愛おしくさえ思えてくるというか(笑)、蓄積された「記憶の珍味」そのものが「わたし自身」のような感覚があったんです。

○中野 おもしろいですね。傷を愛していく という試みは、なかなか一人でいるときには できないんです。痛い目に遭った何年も前の 心の傷がなかなか癒えないということはどな たにもあると思いますが、一人で考えている と、その傷を与えた相手に対しての復讐心と かネガティブな思いがどんどん膨らんでしま って、余計傷が深くなってしまうことはよく あります。だけど、それを一旦客観的に、ち ょっと斜め上から見てみるというプロセスが 実はすごく効果的なことがあります。私とい う存在にとってあの経験はこういう意味があ ったとか、その傷を与えた相手に何かの補償 をしてもらったところで傷が癒えるわけでは ないことに気づく。自分の心を何とか落ちつ けるためにはどうしたらいいんだろうという ときに、そのプロセスを行うことがあるんで す。斜め上の視点をつくってみて、そこから 見るための装置として記憶を一旦形にしてみ るのは、すごくおもしろい試みです。展示を ご覧になった方はわかると思いますが、8つ の香りがあって、それぞれに名前があるんで す。その名前も、ちょっと詩的で詩もついて いるんです。抽象的な内容の詩なのですがす ごく美しい、でもちょっと胸がざわざわする ような詩ですが、あれは諏訪さんの……。

○諏訪 そうです。私の個人的な記憶についてのエピソードです。

○中野 その記憶が非常にパーソナルなはずなんだけど、アブストラクトな形で提示されているので、「あ、私にもこういうことがあ

○諏訪 「記憶の珍味」をなぜ今回つくりたいと思ったかというと、「Journey on the Tongue」だとしたら、口の中での旅、時間経過だったり、空間移動の旅をあじわうことはできないかというチャレンジでしたし、「感情のテイスト」は人間の喜怒哀楽の感情をあじわうというものです。今回はそういう意味では記憶なんです。普通だったら、記憶ってというもがいないし、あじわうものではないと思うんですけれど、記憶をどうやったらあじわえるかみたいなことを考えていたというのもあります。

ところで、ある人が「この先、一生1種類の 食べ物しか食べられなかったら何を選びます か?」と私に質問してくれたことがあります。 中野さんは何にしますか?

○中野 えー? 一生って、あと40年ぐらいありますよね。(笑)40年、1種類……。私は可能なら、1種類のうちにバリエーションのあるものを選びたい。(笑)

○諏訪 どういう?

○中野 何だろう……。パンならバリエーションはあると思う。

○諏訪 パン。パンでも、いろいろなパンが あるからっていう。 ○中野 そう。(笑)小麦の味が好きですね、私。

○諏訪 ああ、なるほど。でも、その質問された方も「白いご飯」と言っていましたね。 白いご飯だったら、想像上で自分の中でいろいろな具を載せて味わえるからとおっしゃったんです。なるほどと思い、私は何だろうと考えたんです。



「好奇心をあじわう小部屋」金沢 21 世紀美術館 2014 Photo: Kikou Keizo

○中野 ああ、そういうことか。

○諏訪 そのときに、同じ発想なんですけれ ども、中野さんとそのご飯の方と。

○中野 通じ合っていますね。(笑)

○諏訪 私も同じで、無色透明でスライム状みたいな食べ物。だけど、その瞬間瞬間で自分が欲しているものに変容しうるもの。白いご飯の人もそうでしたが、私も「想像上で何にでも変容できる食べ物を私は自分でつくることができるから、それにします」と言ったんです。(笑)

○中野 おもしろい。いま、お話しておかなければならないな、と思っていたことの1つを以心伝心かのように諏訪さんが、お話しくださいました。食べ物って、実は食べ物だけじゃなくて香りの要素がものすごく強いんですよね。そしてもう1つの要素は言葉ですね。実は食べ物を味わうという行為のうち、味そのものを味わっているのは15%ぐらいで、

残りの85%は実は香りが大事であるといわれます。つまり、食べ物では香りの部分がかなり味覚に影響をあたえているということなんです。天然のものでも香りがすごくいい醤油を使うとか、数滴でもごま油を垂らすとか、するとすごくおいしく感じることがありますよね。香りの要素は大きいうえに、しかもその香りと記憶の結びつきはとても密接です。そこに経験的に気づいていらしたんだな、と思います。

○諏訪 無色透明で何にでもその瞬間、私の 欲するものに変容するものだったら一生食べ ていけると思ったんです。その後、それって 具体的にどういうものだろうなと思って行き 着いたのが「記憶の珍味」だったんです。

○中野 ああ、そこにつながるんですね。なるほど。

○諏訪 はい。一生同じものを食べるということもそうですが、死ぬ間際に最後の晩餐的に食べたい究極の食べ物ってよく話題に上るじゃないですか。自分にとってそういう究極の食って何だろうなと思ったら、そういう記憶の珍味をあじわいたいなと思ったんです。今までいろいろな食べ物やあじわいをつくってきましたが、今回は、究極の、死ぬ間際に食べたいものをつくりたいと思ったんです。

〇中野 おもしろいですね。この次はないっていう最後の食事ですよね。この人生の終わりに。そういうことを考えてみるだけで、おもしろい。その答えの中にその人の人格があらわれてきそうで、すごくおもしろい質問ですね。相手のパーソナリティーをはかるための。

脳にどうやって五感がそれぞれ入力していくのか、図解などで見たことはありますか? 視覚だったら、眼球の網膜から神経細胞に直接、光の情報が電気信号に変換されて視覚野で処理されて画像をつくります。聴覚は、内耳で音声の空気の疎密波が電気信号に変換され、それが側頭平面という場所に入力して、音の処理から言語情報にまで処理されることがわかっています。触覚は体性感覚野に入力 して処理される。これがホムンクルスで表現 されているものですね、どこをどう触られた か。

一番よくわかっていないのが味覚、嗅覚です。中でも、嗅覚というのは非常におもしろく、これは一番古い感覚と言われています。一番古いと同時に、香りを検知する場所というのは、これは脳の出先機関が露出しているような場所でもあるんですよね、鼻の奥の。すぐに触れる場所ではないんですけれども、そこに直接、香り分子がくっついて、情報が脳の中に投射している神経細胞を伝って入力していくんですよ。

どこに投射するかというと、海馬の近傍に 海馬傍回というのがあり、その海馬傍回に香 りの情報が直接行くんです。つまり記憶と香 りはとても近いところで処理されるんです、 ほかの五感よりも近い。プルーストのマドレ ーヌ効果みたいに、香りがトリガーになって 記憶が思い出されるということはよくあると 思うんですが……それを知ってつくられたの かな、さすがわかっている人だなと思いまし た。



「記憶の珍味」リチュアル 2020 Jan.

○諏訪 私は本当に感覚的にいつもつくっていて、中野さんに会うと「これってどういうことなんでしょう?」といろいろ質問させてもらっているんですけれども、食べたりあじわうことには匂いというのはどうしてもつきもので、ただ今回は記憶をあじわうので、体験された方はわかるかもしれないですが、展示している8種類の匂いはいわゆる食べ物の香りや匂いではないんです。

○中野 いわゆる普通の我々が日常食べる食

べ物というよりも、何かを思い出すきっかけになるような、割とアブストラクトな感じのする香りというか、何と言ったらいいんでしょうね、諏訪さんの作品らしい香りという感じですね。

○諏訪 私の記憶の珍味なので、ただ、ギャラリーに来てくださった方が自分自身記憶と 結びつくような記憶の……。

(2人の前に資生堂パーラーのイチゴパフェが置かれる)



__来ましたね。

○中野 これはちょっと映えを狙って、パフェをお願いしたんですよね。(笑)

○諏訪 はい。ここでパフェを食べるのは、 ちょっと非常識かもしれませんが。

○中野 こんなイベント、実は資生堂で初めてなんじゃないかということで。皆さん、パーラーをご利用ください。(笑)イチゴのいい香りがします。

私、本当に資生堂の香りが好きなんです。これは別に宣伝ではなく個人的に好きで、かなり資生堂の香水を買っているんです。このギャラリーで香りに着目した展覧会をやるというのはおもしろいと思ったんですよね。食べられるけれども、どちらかというとセントというか、鼻で味わうというところもすごく大事にされていて、いつもすごく絶妙な調合をされるんですよね。その言葉の美しさにぴったりのミステリアスな香りの調合なんで

すよね。

香料は今は合成できるようになったからわりと日常的に使えるようになりましれるようになりまされるような扱いで取引されるよと同じような扱いをものだったですよね。私たちの生活に正さく大事なものでした。「正倉院展」に行かれた方は蘭奢待のすごく大倉院展」に行かれた方は関奢待のすごく大倉院展」に行かれた方は関奢待のすごく大倉院展」は入るのに70分待ちですとか、前はそれに輪をがけている場です。くれにもいるのはです。

蘭奢待には切り取った跡というのがあって、 足利義政が切った跡、織田信長が切った跡、 明治天皇がお取りになった跡というのがあっ て、その歴史を想像するだけ何時間でも楽くて めそうでした。香りは、聞くだけではなるるを を味わうようとしてろがあるで たの記憶もあってでが、なるを に生理的な部分でかわっていますが、ないうとであるが人類の歴史であるよした。 でいうものを感じた展示でもありました。 でいうものを感じた展示でもありました。 でいうところにアクセスしまた今後の展開としてな感じがあり、 な感じがあり、それもまた今後のよってく楽しみなんです。

○中野 へえー。絶対音感というのがありますけれども、絶対嗅覚のようなものがあるのかもしれませんね。

○諏訪 きっと生まれ持った才能はあるでしょうね。

○中野 経験的な知識のほうが、まだ科学より上を行っている世界なのかもしれないなというのを感じますね。なかなかそこまでは見たことがなかったです。おもしろいですね。

○諏訪 先ほど裏で聞いたら、中野さんは香水のコレクターというか、すごいマニアックですよね。今日も香水を持ってきてくださって。

○中野 せっかく資生堂に来るんだと思って、 令和の限定の香水って、お買いになった方は います? 資生堂がときどき、こういたもの をこっそり(笑)限定で出すんですよ。令和 にお代がわりをするので、令和の記念の香水 というのが去年予約で出ていて、滑り込みで 間に合い購入しました。令和元年と書いてあ ります。

今日はこの香りをつけてきたんですけれども、皆さんに行き渡るほどつけるとすごいことになるので、ほんのり香る程度ですが、非常に柔らかくてすてきな香り。こういう限定のものを集めるのが好きで、10年前にポスドクでフランスに2年ちょっといたので、そのときに大分手放してはしまったんですけれども、その前にはうちに香水用の冷蔵庫があったんです。(笑)



○諏訪 すごいですね。

○中野 香りの何がいいかというと、記憶と 結びついているのと同時に、言葉によって様 相が変わるところがとてもおもしろいんです。 例えばイチゴだと思いながらイチゴの香りを 嗅ぐと、ベリーの感じがするな、イチゴの香 りがするなと思うんですが、例えばイチゴの 見た目がなくて、「バラの香りですよ」と言 われながらこの香りを嗅ぐとなると、「あ、 甘い感じのローズなのかな」と恐らくイメー ジする人がかなりいるはず。ロジーヌという バラの香りばかり出している香水のブランド がありますが、ロジーヌのベリーローズとい うものがそういうつくりで、バラそのものと いうよりも、イマジナリーのバラのイメージ を香りにしたというものです。私たちが食べ 物を食べるときもそれはすごく影響していて、 例えば同じパフェであっても、ただの「イチ ゴのパフェです」と出されるのと、「どこそ この期間限定の誰それの農家さんが採った朝 摘みのイチゴです」とか、「マダガスカル産 の香りを損なわないように特別な運び方をし たバニラビーンズです」というふうに説明さ れると、全く同じものであってもおいしさが 違うという実験があるのです。

これはワインでもそうで、同じワインであっても、エチケットが高いと「高いですね」と 丸をつけるということがわかっていまして、 実は味覚はすごく言語に左右される。

その最も有名な実験はペプシチャレンジです。 コップの中にペプシとコカ・コーラの両方を 入れておいて、ラベルなしの状態で「どっち が好きですか」と尋ねます。そうすると辛う じてペプシのほうが多かったんです。だけど、 ラベルが見える状態で飲んでもらうと、同じ 被験者なのに「コカ・コーラのほうかおいし い」という人が増えたという実験があるんで す。これは私たちの味覚がラベルによってか なり影響を受けているということの証左であ って、ここまでは行動実験。じゃあ脳はどう なっているのか、どこが働いていたかという と、ラベルによって答えを変えた人は前頭前 野背外側部が働いていて、これまでの記憶と 照らし合わせてラベルの価値を判断し、味覚 の領域を修飾して変えているということがわ かったんです。自分の好みよりも情報のほう

が大事。つまり私たちは情報を食べているということになります。これも「資生堂パーラーのおいしい特別なパフェです」というふうに情報を食べる。「ただのそこらの普通のイチゴではありません」ということになるわけです。

○諏訪 情報で食べているというのは私も思っています。ふだん食べ物を皆さんに差し出すときに、作品という意味では食材名や調理方法、産地などは一切お伝えしません。その法則だとおいしく感じないということになるんでしょうか。



「記憶の珍味」会場風景 2020 Jan.

○中野 でも作品なので、諏訪さんの場合は その情報をマスクしておいて、諏訪さんの情 報を載せていますよね。例えば「Journey on the Tongue」のときのタイトル。

○諏訪 「自由と超越」とか。

○中野 そう、そのような広がりのある言葉

を載せていくわけですよね。それによってすでに知っている、例えばこれはクローブの香りかなとか思っても、あ、これは超越の香りなんだというふうに新しい意味ができていくじゃないですか。その新しい意味が既知の香りに載せられていくところがおもしろく、それがアートなので、日常のおいしいと一線を画す体験なのだと思います。

○諏訪 そういうふうに出すと、受け取る方によって反応が全然違うんです。例えば「これは自由と超越です」と言って食べ物を差し出したときに、「ああ、なるほど。自由と超越ですね」と納得して言う人ももちろんいますし、「自由と超越って思わないけど、私にとっては狂気を感じる」という人もいれば、「ああ、自由と……というか、「イチゴを使っていますか」という人もいます。

○中野 なるほど、ネタを知りたい。

○諏訪 10人いたら10人それぞれ違う反応をするのですが、そういうところも、食べ物を使ってあじわう体験として表現することのおもしろいところです。反応にその人が垣間見えるような気がしていて。

〇中野 そうですね。今日はワークショップ みたいにしてもよかったかもしれません。例 えば皆さんだったら、この資生堂パーラーの イチゴのパフェに何という名前をつけますか ね。諏訪さんだったら何という名前をつけますか れったら何という名前をつけますか なった。何々と何々」という、にわかに は結びつかないものを結びつけて不思議な語 感をもたらしたり。セルジュ・ルタンスの香 水みたいな感じもちょっとします。

○諏訪 うれしいですね。セルジュ・ルタンスはすごく憧れですけれども。何ですかね。中野さんはどうですか?

○中野 私はちょっと凡庸なので、何だろう……。イチゴのイメージ。

○諏訪 パフェって、食べていくとだんだん、最初はもちろんすごくバランスが完璧なシルエットになっていて、だんだん崩して食べていくじゃないですか。下もだんだん溶けてきて混ざってきて、何ていうんですかね、最後はちょっと……。「美しい沼」とかじゃないですか。

○中野 ああ、なにかまた(笑)、耽美な感じでいいですね。

○諏訪 なにかこの沼にずぶずぶとイチゴが 沈んでいく感じが、ちょっとこう罪悪感もあ って、早く食べないといけないけれども、そ んなに……。

○中野 そうですね。どこか、女になっていく少女、という感じですよね。今のでいいか、もう。 (笑) 我こそは発表したいという方がもしいらしたら、お二人ぐらい、いかがですか。どうぞ、いかがですか、なにか思いつかれたら。

○会場 赤と白。

○中野 赤と白。シンプルにいきましたね。 赤と白、おもしろいですね。日本の国旗も赤 と白だったり。白雪姫の雪のような肌の色と 血の色であったり。

これは創造性のテストのようですね。創造性をはかる試験というのがあるんですが、例えばここにフォークが1本あります。これを食べる用途以外にどういう使い方ができるか、制限時間があって、その時間内にどれだけ思いつけるか、その個数でその人のクリエイティビティーをみるというテストなんです。

この試験をやってもらうときにどういう状態だと一番クリエイティビティーが上がるのかというのは幾つか調べられていて、1つは散らかった部屋がよいらしい、というのがあるんです。きれいに整えられた部屋よりも散らかった部屋のほうが思いつく。クリエイティブの仕事をされている方は、余り部屋が片付いていないほうが、意外とはかどったりするのではないですか。思いもよらないものがあるということによ

って新しいことが思いつく可能性が高まるのだと考えられています。もう1つは時間に制限がある状態のほうがよいということ。つまり、締め切りがあるほうが、ないより思いつくようであるということですね……。

○諏訪 じゃあ、やっぱり追い詰められたほうがいいんですね。

今日、中野さんに伺いたいと思ってきたのが、アイデアとか発想とかをうみだす時に、どうしたら効率的にいいアイデアが浮かぶのか、脳を飼いならすみたいなことって、そもそもできるのでしょうか。



○中野 これはもう私自身の課題でもあるのですが。一応実験的には、こうだというものは、ある程度わかってきてはいます。

私たちはディシジョンメーキングの集積体とでもいうか、日々選択をしながら生きていますね。例えば今これを食べるか、 2週間待つべきか。いの選択をなるべくしたい。 い選択をなるべくしたい。 いまか。いの選択をなるがありますが、いいので詳しいことは省いてきる、できというのは、緊急の欲求を我しているときだというんですね。 不思議ですよる。 ある種のストレス下にあるほうが、私たちの脳は正しい、いいチョイスができるようであるときだという。

オンラインゲームなんかで、5分待てば次のライフが手に入るのに、もう面倒くさいといって課金する、なんていうシチュエーションはよくありそうですが、ぼーっとしているときのほうが課金してしまうということかも

しれません。

○諏訪 それは本能的に、野生の力とか直感 が働くとかっていうことですか。

○中野 そういう感覚になるんだろうと思います、やはり。危機が迫っている状態のほうが、ノルアドレナリンが出て、より効率的にいいディシジョンメーキングは何かということを即座に考えられるようになるということなんだと解釈されています。日々研ぎ澄まされているという状態をつくるのが効率的なクリエーションにはいいのかもしれないですね。



○諏訪 その状態はどうやったらつくれるん でしょうか。

○中野 実は諏訪さんは、前に聞いたらアトリエを地方に移すという、新しい試みをされているんですよね。都会の利便性の高い生活をちょっと離れて、不便な環境に我が身を置くという。

○諏訪 ずっと拠点が東京なのですが、去年の夏に都内の事務所をやむを得ず出ないといけなくなって引っ越し先を探していたんです。最初はそのまま都内のどこかで探していたのですが、ふと、あれ、もう都心じゃなくてもいかなと思って、森の中がいいかなと思って、森の中に移していると、住んでいるのは東京なったが、はます。私は能登半島の自然の中で生まれています。私は能登半島の自然の中で生まれていて、都市の中で生活していると、情報量

も多いですし、時間の流れ方もやはりすごく 違うと思うことがあって、そういう場所と山 の中を行き来することによって、もうちょっ と野生の力を鍛えたいというか、感覚を洗練 させたいなと思うようになったんです。

○中野 これは、と思ったのが、森の中に住むというときには、アーティストだからお庭をきれいに整えたりするのかな、と思うじゃないですか。でも諏訪さんは違ったんですよね。自然の状態にしておきたい、雑草も生えるがままにしようって。

○諏訪 雑草はそのままで。私のもともとの 事務所は恵比寿の街の真ん中にあってコンク リートに囲まれていたところだったんですけ れど、ふと見ると、その事務所の前にコンク リートを打ち破って生えてきている雑草があ るんです。皆さん、日常的に東京でも見ると 思うんですが、その雑草が夏の間に電柱に巻 きつき始めて、すごい勢いで伸びていったん ですよ。これもある意味野生だし、自然だな と思ったんです。それを私は鋏で切って、山 のアトリエに持っていったんですよ。山の土 にグサッと挿したんですよね。その後10日 ぐらい経って行ってみたら、それが根付いて 伸びていたんですよ。すごいなと思って、そ れって自然ではあるけれど、東京の都会の中 の野生や自然が本当の山の自然の中でやって いけるのかと、自分を試すような感じでもあ るんですけれど、そういうことを何度か雑草 で試しています。

○中野 諏訪さんは、やはりブリュットなものが好きなんですね。加工された成形されたきれいなものよりも、生を感じるものをすごく愛しているというか。

今はあまり見なくなりましたが、私たちが子供のころには、わりと電車の中でややエキセントリックに感じられる独り言をいう人がそこそこの割合でいたと思うんですが、この声を諏訪さんはおもしろいと感じてインスピレーションを得たりする。確かに、啓示的な感覚があり、おもしろいと思います。

○諏訪 以前、新大久保で中野さんにその録

音したものを聞いてもらいました。



「後をひく悔しさとさらに怒りさえもこみ上げるテイスト/ 感覚であじわう感情のテイスト」2008 Photo: Hiroshi Iwasaki

○諏訪 自分では、そんなに意識してなかっ

たんですけれども。でも本当に、あの時は車両全体に響きわたるような大声で、滑舌もよくて、女性だったんです、私と同い年ぐらいの。周りの人が見て見ぬふりみたいな感じの状況ではあったんですが、明らかに皆、耳には入っているんですよね。いろいろ話している言葉のセレクトが、もう

明らかに皆、耳には入っているんですよね。いろいろ話している言葉のセレクトが、見に絶妙ですばらしかったんです。別にそれに意味はないんですが、多分彼女がふだん耳にしている言葉とか音声を自動的にピックなって、それを出しているとはでもんなことはでしょう。意識してでもそんなことはでいって、無意識に近い感じで脳がどうやってそういう言葉をピックアップして、その言葉というような、CMとかテレビで流れるよう

なちょっとした一言だったり、多分お母さんが言ったちょっとした台詞だったり、その絶妙なセレクトって脳がどうやってそれをつくり出すのか、すごい不思議だと思ったんです。

○諏訪 私はもう目が離せなくなって録音をして、その後もつい後をつけてしまって、話しかけたいなという衝動に駆られましたね。 どんな人にも無意識に出てくるそういう、なにか。その方だったら言葉ですが、ありますよね。本人は意識していないのに出てしまうものに、私はなにか美しさというか、愛おしさみたいなものを感じてしまうんです。

○中野 これは、音の記憶が他よりも残りやすいからかもしれません。アルツハイマー型認知症になっても、聴覚の記憶っていうのはわりと保存されると言われます。見たものを忘れても、耳の記憶というのは残る。なぜなのかはよくわかっていません。私たちは、目は閉じることはできるけれども、耳を閉じることはできるけれども、耳を閉じることはできない。騒音のほうが視覚的なディストラクタよりもずっと人を苛立たせます。

鼻もふさぐことが難しいのですが、我々の 祖先である哺乳類は、ほとんどが夜行性で、 視覚よりも聴覚と嗅覚に頼って生き延びてき たといわれていますよね。嗅覚と聴覚は、 我々にとっては思ったよりもずっと大事なも のなのかもしれないんです。我々が「知らな いうちに何かを選ばされている」というとき には、耳や香りの情報に左右されているということがしばしばあるということがわかっているんです。

○諏訪 その感覚を洗練させられることができれば、さっきのチョイスをするのも直感で選んだり決めたりができるんじゃないかなって思うんです。



「記憶の珍味」リチュアル 2020 Jan.

○中野 そうですね。クリエイティビティー

に関する知見というのは、先ほどお話ししたような実験というのは幾つかあるんですが、さもそれよりももっと高度なところを諏訪されば求めているのかもしれませんね。 洗練されるというのが、なかなか科学の俎上に乗りにくいところではありますが…でするいとにろってはありますがでは、発想の鋭さだったり、クリエイデとといる、そのための方法論としていましたけれども、フリーが大事とか言われていますが、そこであえて

ストレスを適度に与えるということが創造性

を刺激するのによいというのは確かに面白くて、これからの製作には良いことのように思

○諏訪 そうですね。ふだん何かを考えたりとかするとき、例えば夜のプールみたいな、夜のプールってもちろん真っ暗で、水面がどこかもわからないぐらいで、水の中ももちろん真っ暗で深さも広さもわからないみたいな、夜の海でもいいんですけれども、イメージとしてはそういうところに潜って手探りでそこ

にあるなんだかわからないものをとりあえず 掴んでみる、という感じなんですよ。その方 法は全然洗練されてなくて、もの凄くもがら ながら、手探りで息苦しくて、とそれがなにき で上がってきて見てみないとそれがなにな のかわからなくて、それを何度も繰いらない といけないから結構つらい作業というも物 を考えるときはそういう感覚なんですが、かな を考えるとそれを洗練させる方法はないかな というのを……。

○中野 洗練させるというのは、もうちょっとスムースにやりたいということですかね。

○諏訪 そうですね。脳の中も、私のイメージでは夜のプールなんですよね。その暗闇の中に潜っていって、手掴みでほとんどなにも見えないのになにかを掴み取るみたいな、そういう意味では今回のあの下の展覧会も、資生堂ギャラリーって、皆さんご存知のとおり、ちょっと階段を下りていって、こう……。

○中野 記憶の深層に潜っていくような。



「記憶の珍味」会場風景 2020 Jan.

○諏訪 そうなんです。華やかな銀座の中なのに、細い階段を下りていってどんどん奥へ入っていって、なんだかある意味、体内や脳の奥に入っていくような感じがありますよね。今回はあの場所を脳としてつくりました。そういう、ある意味夜のプール的な、脳の奥底にどんどん入っていって、沈殿している自分自身でも気づいてなくて、忘れかけていた

います。

というか、忘れてしまっているような記憶の 珍味に触れるような、それを手に取ってあじ わうという体験をつくりたいなと思ったんで す。

○中野 そうなんですね。今日はご僧侶もい らしているので、私が間違ったことを言った ら訂正していただきたいのですが、内観とい う方法があるんです。自分の心の中に自分で 分け入っていくということで、修行の1つと いうことでよろしいですかね。心得のない人 がやるということはないのですが、その入り 口に少し似ていますね。自分の心の中って、 実は自分がよくわかっているようでいて余り 顧みることはない。例えば今日は帰ってラー メンを食べたいと思ったとします。ラーメン を食べたいとなんで思ったんだろうと深掘り することはまずないですよね。けれども、明 日もしここにいる皆さんの裡のどなたかがラ ーメンを食べたいなと思ったら、今私が「ラ ーメン|という言葉を言ったせいかもしれな い。また、イチゴの何かを食べたいなと思っ たとしたら、それはいまここにイチゴがある からかもしれない。生起する衝動は、勝手に そう思ったのではなくて、何らかの刺激があ ったからそう思うのだ、という考え方です。

自分の心の中って把握しているようでいて、結構なおざりになっているのですよね。それを見直す1つのきっかけとして諏訪さんの空間はひとつのきっかけになるんじゃないかなとも思うんです。心理学的なセッションの1つみたいな……。そんな風に味わうことができるのが、諏訪さんの展示のいいところなんじゃないかなと思います。



○諏訪 そうなってもらったらうれしいです

ね。体験が作品ということは、単に物質的な 作品を置いて、それを鑑賞していただくというものではないので、体験される方に委ねる 部分がすごく大きいんです。今回はそうい道 意味では、記憶の珍味をあじわうことを通い て体験する人が自分自身をあじわうみたいる ことができたらいいと思っていて、もちろが ことができたらいいと思っないるといてもいいんですが、自分自身をあじわうって なかなかないんじゃないかなと思ったんで す。



「記憶の珍味」リチュアルより 2020 Jan.

○中野 ないですよね。ちょっとオートファ ジー的な感じもします。オートファジーとい うのは、自分自身を消化して自分自身のエネ ルギーや新しい組織に使う材料にしたりする ことをさす生物学の用語ですが、クリエーシ ョンにも同じようなところがあるのかもしれ ませんね。私たちがかつて繰り返してきた何 がしかの記憶を、また消化してレクリエーシ ョンして新しい行動とか体験にしていく。そ ういうことを恐らく日々私たちはしているん でしょう。そのオートファジー的な記憶のあ り方をより意識的にすることで明日にもっと 価値的が生まれるような、そういう内的な体 験ができたらすごく楽しいですね。諏訪さん の展示を通してもそういうことができるので はないかと思いますし、まだ展示をご覧にな っていない方は、私たちのトークをそのタネ にして展示の体験をより広げていっていただ けるとうれしいです。

○諏訪 ありがとうございます。 3 月 2 2 日まで展示が続くので、何度でも来ていただいて「記憶の珍味」をあじわうことを通して

『自分自身をあじわう』という体験をしていただきたいです。また会場で「記憶の珍味をあじわうリチュアル」というパフォーマンスをやります。それは着席して体験していただくこともできますし、観覧していただくこともできますので、そちらもよかったらぜひ体験していただけたらうれしいです。

最後にもう一度、諏訪さんと中野さんに拍手をお願いして、今日は終わりにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○中野 ありがとうございました。(拍手)